水は天からもらい水

小父さんの話をしようと思う。

小父さんの名は　高さん」。小父さんの様な立場の人は現代の日本にはいない。日本で最後の人だったのではないかと思っている。

出会いは私が七才の一月三日、母の再婚式当日。戦後間もない山村の農家の式であったが、村中の人で賑やかな宴会の母屋の裏に、喧噪から切り離された長屋が二棟あった。式に退屈した私が、これから我家になる其処ここの探索にと、独りで裏へ回って発見した長屋は、土壁がむき出しの粗末なものだった。まず牛とその匂いに驚かされる。恐る恐るその前を通り過ぎ、次に目にしたのが小父さんだった。牛床の隣の、戸もない部屋の一角。鎌や鍬や竹のザルの置かれた土間で、絣のような服を着た小柄な痩せた人が、縄を編んでいた。坊主頭に、窪んだ双眸。牛よりも怖くて、何も言わずに踵を返した。

数日後、里帰りを済ませた母と私の、新しい家族との初めての夕食。囲炉裏を囲んでの重苦しい食事が終わろうとしたその時、勝手口からあの小父さんが入って来た。すでに見知っていたのか、母は　高さん」と声をかけ、土間に降りたち、何やら食事の支度を始めた。怪訝そうな私に、義祖母が　高やんや」と教える。高やん」こと　高さん」は、私には竈の陰でよく見えなかったのだが。母の差し出した食事を、土間で食べ終わり、膳箱を片付け、一言も言わずに出て行った。

小父さんと家族の関係を理解する事は難しかった。いつも家の周りの何処かで働いていた。稲、麦、野菜は勿論、イ草、煙草、綿花等多種多様な作物の栽培、山林の伐採、薪割り、炭焼き等々。機械のない時代で全部手作業。どれ程重労働だったか。両親も同様に働いていたが、小父さんは盆暮れは無論年中無休。ご飯は土間で木の切り株に座って食べ、食べたら消える。家に上がったことがないから、何処で寝ているのかも知らなかった。小父さんの事が漸く判り始めたのは、十歳になった頃だろうか。小父さんが隣村の小作農家から働きに来た事。給金の代わりに実家にお金を渡した事。小父さんには三度の食事と寝る場所だけがある事。作男と言えば聞こえは良いが、身売りである。現行法では禁じられているが、戦前はまだ行われていたのだ。文盲だった小父さんには何の選択肢もなかったのだろう。

当時小学生だった私に事の良し悪しを判ずる力はなかったが、それでもどうしても嫌だったことがある。人の名、まして年長者を　さん」でなく　やん」と呼ぶ事。人を見下し、侮蔑する呼び方。生理的に受けつけなかった。高圧的な態度に対する嫌悪は、三つ子の魂百までもで、今も変わらずある。

戦後の農村は貧しかった。山村には一軒の店もなく、行商のおばさんだけが頼りで、殆ど自給自足。それでも私や家族は白米に一、二品のおかずがあったが、小父さんは麦飯に漬物、汁物が大方。母は義祖母の目を盗んで、おかずを渡していたが、いつもできるのではない。お金を一円も持たない小父さんは、何かを買うこともできない。あてがわれたものが全て。それも食事だけで、ラジオもテレビも見聞きすることなく、談笑、娯楽は一切なし。電気のない長屋

大阪のいぶき 127 号　11/1 号掲載

の屋根裏で寝ていた。

五年生の時、学校で習ったカレーを作った。私の初めての料理だ。出来上がりを小父さんにもふるまった。珍しそうに食べた小父さんは満面の笑顔で

「ちゃん、こりゃあうめえなあ」。

初めての料理を誉められた。普段会話のない物を言わない小父さんに。嬉しくなったことを今でも忘れない。小父さんは本当に感動していたのだ。

人は生きる為に食べる。しかしパンのみにて生きるにあらず。学び、遊び、働き、子孫を作り…。では、小父さんは何の為に食べた。生きる、ただ其れだけのための食事、それは餌。

世界にはかっての奴隷の様に、力で隷属を強いられている人たちが今なお多くいる。食事さえ満足に与えられなく、飢餓に苦しんでいる。幸い今の日本では、人身売買は禁止で、表立って行われる事はない。小父さんが最後の人だったと思いたい。

大学生の時、帰省して、小父さんの入院を知った。義祖母は他界しており、入院は母の計らいだった。見舞いの私に小父さんは笑顔で話しかけてきた。

「ちゃん、こかあ、まんまがうめえけえなあ。せいに、痔でのうてよかったあ。痔はいてえけえなあ」

私は笑顔を返すしかなかった。小父さんは末期の癌だった。数日後に、旅立った小父さんは、初めて自由人になった。

実家の裏山にぽつんと小父さんの墓。

水は天から貰い水。いつかカレーをお供えに。

大阪のいぶき 127 号　11/1 号掲載